［特別講演Ⅱ］

医学教育における課題と展望

――医学教育学における医史学との接点とその重要性――

吉田　素文

九州大学大学院医学研究院 医学教育学

今回は医学教育におけるこの四半世紀の流れと現在の課題，今後の展望，そして最後に医学教育学における医史学との接点とその重要性について，本大会にご参加の皆様と検討することができたなら誠にありがたいと考える次第である．

さて，医学教育を研究対象とし，その問題解決を図るのが医学教育学であるが，医学教育とは何であろうか．端的には医師養成の過程（プロセス）と考えて，まず差支えのないところではあるが，その期間はどこからどこまでを指すのであろうか．日本の場合，狭義には高校卒業生を迎え入れて（この時点では入試の成績以外は他の学部とほぼ同じ），医師国家試験を受験するまでの大学医学部（現在は「医学科」）における教育課程（コース）を指す場合もある．しかし，医師であれば自らの養成プロセスが大学で終わったと実感している者はいまい．いや寧ろ医学部卒業後にこそ，医師たる自分の知識・技能・態度が培われたのであり，医学部の課程はその序章に過ぎなかったと振り返る医師や医学研究者も多かろう．ともあれ，今回は医学部（医学科）における四半世紀前の医学教育と今の医学教育との違い，その違いが生じた経緯を話題の中心に置き，現在の，特にわが国における医学教育の課題と展望を論じたいと考えている．

四半世紀前，自分が医学生の頃には，例えば，医療コミュニケーションや身体診察などの実技の訓練と評価，医療安全，臨床倫理などの分野（これらは「医のプロフェッショナリズム教育」の一部とカテゴライズされている）を系統的に学ぶ機会はなかった．15年前に外科医から現在の仕事を始めた当初から現在に至るまで，これらの教育内容に一貫して興味を持ち，医学科の授業を担当するかたわら，全国的な普及に努めてきた．実際には，これらの教育は，全国80の医学教育課程で実施されるようになっている．このほか，医師・医学研究者養成の全過程，その制度に深い興味がある．医師が如何に医師になって行くか，医師を目指す若者，あるいはさらに研鑽を積もうとする医師にとって，効果的な学習方略や教育制度とはどういうものであるか，興味は尽きない．

一方，演者個人に医史学への興味があるのかと自問すると，ないとも言えるしあるとも言える．無論，それまでの外科医の日常から，医学教育に関する学問体系や学術活動に身を投じた15年前は，医学教育におけるわが国と海外との差異について興味が湧き，その歴史的経緯について調べたり，耳にしたりすることはあった．しかし，九州大学医学歴史館の建設と展示，そして史料保存にかかわり始め，オフィスの隣にある医学図書館を訪れ，稀覯本を見せていただいたのであるが，残念ながら夢中になるほどの興味は湧かなかった．これをもって，「医史学に向かって自ら湧き出る興味は今の所ない」と結論するのは拙速に過ぎるのかもしれないが．一方，結局のところ，医師であっても医学研究者であっても「先達に学ぶ」という側面がある．このことは，医学教育に関する研究対象が医学教育の個人史そのものであり，その世代を辿り，理解を深めることは最終的には医史学に分け入っていくことを意味するのではないだろうか．

以上のようなことをご参加会員の皆様と議論できれば本望である．